

立ち読み版



株式会社モダン・ボーイズ COO
株式会社フェザンレーヴ 特別顧問
謝罪マスター

たけなか

いさお

竹中 功 さん

1959年、大阪市生まれ。同志社大学法学部法律学科卒業、同志社大学大学院総合政策科学研究科修士課程修了。1981年、吉本興業株式会社入社。宣伝広報室を設立し、吉本総合芸能学院（よしもとNSC）の開校や、なんばグランド花月などの開場にも携わる。株式会社よしもとクリエイティブ・エージェンシー専務取締役などを経て、2015年退社。現在は「謝罪マスター」としての活動の傍ら、株式会社フェザンレーヴの特別顧問を務める。著書『よい謝罪』『謝罪力』（ともに日経BP社）、『お金をかけずにモノを売る広報視点』（経済界）、など。

【写真】安岡 嘉

元・吉本興業の腕利き広報マンが描く キャリアデザインとは

【取材・文】原 正紀

株式会社クオリティ・オブ・ライフ代表取締役、株式会社スマートバリュー社外取締役、特定非営利活動法人キャリアコンサルティング協議会常務理事・事務局長、高知大学客員教授・経営協議会委員、成城大学非常勤講師、中小企業診断士、早稲田大学卒業後、株式会社リクルートを経て起業し、人材ソーシャルビジネスを展開。著書「定年後の仕事は40代で決めなさい」（徳間書店）、「インタビューの教科書」（同友館）など多数。

HARA'S BEFORE

吉本興業で約35年間、広報マンなどを務めた竹中さん。所属芸人の不祥事への対応もこなし、「謝罪マスター」というオンリーワンのポジションを築いた。現在は講演など個人での活動の傍ら、企業経営にも動んでいる。そのキャリアデザインについて聞いてみたい。



「謝罪マスター」からのメッセージ

原：吉本興業から独立後、「謝罪マスター」として活動する傍ら、企業経営にも携わっておられますね。

竹中：個人では謝罪マスターとして、執筆、講演、研修講師などの活動をしてきました。特別顧問として関わっている株式会社フェザンレーヴは30名ほどの広告代理店で、全員がクリエイターであり、営業でもあるという会社です。今後はDXや地域創生などのビジネスを伸ばしたいということで、社長を務めた後、現在は特別顧問として参画しています。

地方創生には、よしもと時代から積極的に関わっていました。東北6県の責任者として仙台に住んでいるうちに、地域の仕事が増えてきて仙台から会津若松に引っ越したほどです。その昔、朝鮮人参で儲けた奉行が会津にいたので、今度はお笑い芸人で街を活性化させようと、地域創生の中で「会津藩 お笑い奉行」を命名さ

れ、よしもとの資源を生かさせたらと思っています。お笑いは、その土地ならではのスタイルがあります。東京一極だけで成功者というのは違うと思い、地方からお笑いを創ろうと考えて取り組んでいました。地方の文化や食も笑いの題材になるので、地域創生は面白いと思っていました。

個人的には、DXは得意な仕事ではありません。やるべきことを検討して、公共などの仕事にもコンテンツやネットワークを生かして入っていこうとしています。たとえば、「Locatone™」（ロケトーン）というソニーが開発した技術でサウンドAR™を入れたヘッドホンで、外の音も聞きながら街案内をする企画もうまく進んでいます。先日は、小説を音楽にするユニット「YOASOBI」の「大正浪漫」という曲を使って、大正浪漫的な街を探し、ロケトーンを使って地域を紹介する企画などを行いました。

原：「謝罪マスター」が生まれた経緯を教えてください。

竹中：よしもとでは長く広報をしており、メディアを回って記事に載せてもらおうと動き回っていました。40年ほど前の当時は、広報という部署が企業内にあまりない時代でしたし、新聞社に「演劇担当」の記者はいても、「演芸担当」はいませんでした。だから、ボクが勝手に「演芸記者クラブ」を立ち上げて、記者たちを巻き込んでいきました。いろいろと情報提供をしていくうちに、記事にしてもらおうコツを覚えて広報らしくなっていましたね。

そうしているとトラブルも起こるようになり、